

「オリンピックへの想い」

今、コロナ禍での東京オリンピック開催が揺れている。すでに外国人の観客を受け入れないことは先日発表された。「東北復興」「コロナ収束」を旗印に上げてはいるが、果たしてこの世界的な未曾有の危機に、どうしてもオリンピックは開催しなければならないのだろうか？

近代オリンピックの歴史は、今から 125 年前アテネでの開催から始まっている。女子競技はなく、参加 13 か国、アメリカの圧倒的な強さが目立った大会であったという。陸上競技の男子 100m の優勝タイムは 12 秒 00 であった。優勝したトーマス・バーク選手(米)が、もし今、世界記録保持者ウサイン・ボルト選手と走ったとしたら、ボルト選手がゴールした時、トーマス選手はまだ 80m 地点にしか達していないと言う驚くべき結果になる。

人類は 1 世紀以上を費やして、100m の記録を約 3 秒近く短縮した。僅か 3 秒の短縮に 100 年以上もの歳月を要したと考えるならば、実生活に何のメリットもないこの営みに費やした労力は、スポーツそのものに意味を見出さない限り、スポーツの存在すら否定しかねないだろう。あらためて「スポーツとは何か？」を問い直す必要があるような気がする。

競技における世界記録は、言うまでもなく人類の可能性のメルクマールに違いない。新記録の更新は人類の現時点での到達点を示し、さらにこれからの可能性をも示唆している。この到達点や可能性は、人間の運動能力を指すだけでなく、用具開発や環境整備なども含み込んだ総合的で社会的なものだろう。そして、オリンピックがその集大成と捉えるなら、その意義は「平和の祭典」という一点に留まることはない。

1964 年の東京オリンピックは、敗戦からの復活をアピールし、高度経済成長下で開催されたまさに「平和の祭典」に他ならなかった。しかし、1984 年のロサンゼルスオリンピック以来、オリンピックは商業化され、巨額の費用負担が余儀なくされてきている。今回の東京オリンピックもすでに予算超過しているという。巨額の負債を抱える東京、そして日本、そのしわ寄せはいつどこに来るのかと考えざるを得ない。

人間の能力に感嘆し、更なる高みを目指す未来に想いを馳せるオリンピックが、実はその未来に負担を強いているという現実を、是が非でも開催したいと考えている人々に問うてみたい。

(丹羽 豊)